

小正月、村の辻にある道祖神に「おやなぎさん」が建てられ、地域の人々が家内安全や豊作を祈っていた。キリスト教とは違うけれども「ああ、いいなあ」と思う。

牧師であっても私は、寺や神社が好きだ。その神仏を頼みにはしないが、敬して頭垂れることはある。促されるままに坐禅もしたし、修験者のような滝行まで経験した。

そのどれもが真剣で、謙虚で、それなりに興味深いものであった。

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない(出エジプト20:3)」。列席した葬式で焼香しても、招かれた祭りでお神酒を飲んでも、敬して頭垂れるだけだ。

原理主義キリスト教は他宗教をやたらに攻撃するが、「ほかに神があってはならぬ」という言葉を誤読している、と思う。教条的な排他性によって内部の緊張を高め、半ば監視し合いながら、我が集団だけが「義」であるかのように声高に訴えるキリスト教。

人間を人間が操縦するような息苦しい信仰こそ、「ほかに神ある」偶像崇拝。

「ほかに神があってはならぬ」という第一戒。この十戒の前文は「わたしは主(神名 yahwe)、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である(20:2)。「奴隷の家」は元より、人間がつくったいかなるものの奴隷になってはいけない。

自由とはある意味で厳しい。自分で決断し、自分で試み、責任を負うからだ。義や罪が図式化された「人間の信仰」に命じられるまま従うことは、逡巡や葛藤がなく楽ではあろう。

だが主なる神は暗に命じている。「厳しくとも自由でおれ」と。

「イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた(マタイ4:1)」。霊と悪魔が混じり合っていておもしろい。それにしてもイエスは、何のために悪魔から誘惑を受けるのか。

他人事にしたら分かるまい。私たち自身が、自分は悪魔の誘惑を受けているか、何かしら罪人なのか、と省みると心当たりがあるはずだ。

そうだ、イエスは「私と同じ」になられた。無垢な聖人ではない。迷い、悩み、俗っぽく、奴隷根性が抜けない罪人として、悪魔から誘惑を受けられたのだ。

イエスは断食で腹が減っている(4:2)。「すると、誘惑する者が来てイエスに言った。〔神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ〕(4:3)」。

イエスは「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる(4:4)」と答えた。金言となっている御言葉の一つだ。私は子供の頃この御言葉を「パンの他にオカズも食べる」と解していたが、あながち間違いでもなさそう。

パンや御飯はどの家庭でも同じだが、オカズは違う。「一つ一つの言葉やオカズ」が一人ひとり異なっているイメージ。逆にまた、生きるためには「神の口から出る」信仰の言葉だけでなく、「パン」も不可欠だ。日用の糧、住まい、仕事、人間関係といった「パン」も決して疎かにできない。

イエスは「パン」を軽視していない。なにしろ「腹減ったなあ(4:2)」となっているのだから。そこへ悪魔は「パンの奇跡を」と誘惑する(4:3)。これが偶像崇拝、「神の信仰」を人間の弱みであるパンに引き寄せる。

その誘惑に対するイエスの答えは明快、「退け、サタン(4:10)」だ。私たちは「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる(4:4)」。腹が減り、「一つ一つ」、折々に与えられ、これを食べる。



《おまけのひとこと》

キリストは腹が減っている 私のように 己が俗っぽさに弱っている 私のように いくら持ちあげて奉っても 地べたにしゃがんでいる 時折きっぱり語ることがある 然りは然り 否は否と